

## 第5回 信州学び円卓会議

日 時：令和6年10月16日（水）  
15時00分～17時00分  
場 所：長野県教育会館  
（オンライン併用）

### 1 開 会

#### ○樋口振興幹

全員おそろいになりましたので、ただいまから「第5回信州学び円卓会議」を開会いたします。

委員の皆様におかれましては、御多忙のところ御出席をいただきまして、誠にありがとうございます。会議の進行を務めます長野県県民文化部県民の学び支援課の樋口と申します。よろしくお願いいたします。

初めに出欠状況の報告をさせていただきます。長野県市町村教育委員会連絡協議会会長、長野市教育長職務代理者の近藤委員様、須坂市長の三木委員様、信州大学教育学部学部長の村松委員様、以上3名の方は、御都合により本日は御欠席となっております。また、軽井沢風越学園校長岩瀬委員様、NPO 法人 Hug 代表篠田委員様、長野県野沢北高等学校校長柳沢委員様におかれましては、オンラインにて御参加いただいております。

なお、オブザーバーとしまして、阿部知事、武田教育長に出席いただいております。よろしくお願いいたします。

最初に会議事項に入ります前に、事務局からあらかじめ御承知おきいただきたい点につきまして3点御説明いたします。

まず1点目でございますが、本会議については公開で行うとともに、会議資料、議事録、撮影した写真等につきましては会議終了後に県ホームページ等に掲載する予定としております。

続いて2点目でございますが、会議の様子につきましては、YouTube にてライブ配信しておりますとともに、議事録作成等のために録音させていただきます。

最後に3点目でございますが、議論の内容を視覚化するためのグラフィックレコーディングを実施し、会議の終わりに振り返りを行う際に使用をする予定としております。また、完成品につきましては、会議終了後に県ホームページ等へ掲載する予定としております。

配付資料につきましては、お手元の配付資料一覧に記載のとおりでございます。御確認いただいて、不足資料等あれば事務局のほうに御連絡いただければと思います。よろしいでしょうか。

それでは、会議事項に入らせていただきます。

ここからの進行は、荒井座長にお願いいたします。

### 2 事務局説明

#### ○荒井座長

座長を拝命しております信州大学の荒井でございます。

信州学び円卓会議では、長野県の子どもたちにとって最適な学びのあり方について様々な御意見を頂戴してきました。そして、様々な関係団体における取組につなげる、また、教育改革に対する機運の醸成を図ることを目的として、これまでの議論を積み重ねて参りました。

昨年9月1日にスタートしまして、今年の7月30日に、座長の私が知事と教育長と共に記者会見に臨み、「信州学び円卓会議からのメッセージ」と題して、県民の皆様と今後共有していきたい学びのあり方についてメッセージを発信し、知事と教育長からも決意表明をしていただきました。

今後は、これまでの議論の中身を踏まえて実行に移していくフェーズとして、様々なお立場にあられる皆様の当事者意識を醸成し、連携・協働を通じて具体的な行動につなげていく段階にあると考えています。事実、7月30日のメッセージ発信後は、教育や学びに関わる関係団体との意見交換を重ねてきたところであります。

本日は、まず、並行して行って参りました地域版の円卓会議の取組状況について、事務局から御報告いただくとともに、この間、多くの教員の方々に御協力いただきました教員向けのアンケートの結果の概要を共有し、さらには先ほどお話しした教育関係団体との意見交換の内容について、結果を共有させていただきます。

その後、今後の信州学び円卓会議のあり方や議論の展開についてお一方ずつ御意見をいただこうと思っております。

なお、今回もオブザーバー参加ということで、知事、そして教育長にも御参加いただいておりますので、ぜひ忌憚のない御意見をいただければと思っております。

それでは次第を御覧ください。

冒頭、地域版信州学び円卓会議に関する活動の取組状況の報告を事務局からお願いいたします。

#### ○片桐主任

それでは、地域版信州学び円卓会議に関する活動報告をいたします。

参考資料1「地域版信州学び円卓会議の取組状況について」を御覧ください。

今年度から始まりました地域版信州学び円卓会議については、人口減少や少子化の進展により検討が急務である中山間地域の学びのあり方に焦点を当て、特に人口減少の著しい木曾、南信州地域を中心に、各地域の具体的な取組につながることを目指し、機運醸成や議論の促進を図っています。

実施内容につきまして、木曾地域においては機運醸成を図ることを目的に、地域全体で学ぶ機会を提供しています。

5月に実施した第1回地域版信州学び円卓会議に続き、この間、9月2日及び3日の2日間にわたって、第2回地域版信州学び円卓会議を開催いたしました。テーマを「地域の持続可能性を高める学びの広域的な連携について」とし、全国4団体の教育委員会の皆様から、先進事例を発表いただきました。

①北海道更別村教育委員会からは、指導主事の共同設置、②福島県富岡町教育委員会からは、共通のビジョンに基づく近隣市町村との連携、③岐阜県羽島郡二町教育委員会から

は、地方自治法に基づく教育委員会の共同設置、④大分県玖珠町教育委員会からは、小規模自治体が取り組む様々な連携による教育環境の整備に関してそれぞれ発表いただき、県内の教育や学校関係者の皆様など、より多くの方に参加を呼びかけ、それぞれの立場でどんな取組ができるか考えていただくきっかけづくりを行いました。

続いて、2ページ目を御覧ください。南信州地域西部3村の現状・課題把握について御報告いたします。

5月に実施した第1回地域版信州学び円卓会議において、阿智村教育委員会の教育長から、自治体間の連携の重要性として、村費で雇う教職員の共有など具体的な意見もいただきました。このことから、根羽村とあわせて阿智村、そこに平谷村を加えた西部3村と呼ばれる地域でどのような取組が考えられるか、まずはヒアリングを行い、教育に関する現状、課題を整理しました。

根羽村のヒアリングの際は、大久保委員をはじめ、岩瀬委員、三輪委員にも現地で御助言をいただきました。誠にありがとうございました。

今後の予定ですが、木曾地域においては、来年1月に第3回地域版信州学び円卓会議を予定しており、各地域の機運醸成を図りつつ、今年度の勉強会を通じて各関係者と一定の共通認識が持てたことから、今後は木曾地域振興局において、教育分野における広域連携について研究していく予定です。

南信州地域においては、ヒアリングを通して見えてきた共通課題について各教育長へ報告を行い、具体的な取組の検討に向けた意見交換会を実施する予定です。

事務局からの報告は以上となります。

#### ○荒井座長

ありがとうございました。

事務局から説明がありました通り、今後2つの地域を中心として、課題の整理と理解を深めていく取組を進めてまいりますので、御承知おきください。

続きまして、教員向けのアンケートの集計結果に関してです。まず初めに、信州学び円卓会議と県教育委員会との共同で実施したアンケートに御協力いただいた現職の教職員の皆様には、心から感謝申し上げたいと思っております。この結果を踏まえて、今後の議論につなげていきたいと思っております。

では、事務局から、結果の概要について御報告をお願いいたします。

#### ○丸山課長

県民の学び支援課長の丸山と申します。私のほうから、教員向けアンケートの概要及び結果について御説明をいたします。

お手元の資料1、「教員向けアンケート集計結果（要約版）」を御覧いただきたいと思っております。

まず、アンケートの概要について御説明いたします。

資料の2ページを御覧ください。

まず目的でございますが、今、荒井座長からお話しいただきましたとおり、信州学び円卓会議において御意見をいただきました教員のチャレンジや働き方改革などの促進に向け

た具体的な方策の検討に当たり、教員の皆様の声を反映させていただくとともに、教員、学校現場の実情を県民の皆様にお示しすることで、県全体で教員の皆様の支えていこうという機運醸成を図ることを目的としております。

調査対象でございますが、小学校、中学校、義務教育学校、高等学校及び特別支援学校に勤務される管理職、それから授業をお持ちの教員の皆様でございます。

調査方法は、対象を抽出して調査を行う標本調査において一般的に用いられる手法に準じて実施し、校種別の教員数や地域など、調査対象の特性を考慮いたしました。

調査期間は7月上旬からおおむね1か月間で、アンケートの配付数2,028人に対して1,054人の皆様から御回答をいただき、回答率は52.0%でした。改めまして、多くの皆様に御協力をいただきましたことを、この場をお借りして御礼申し上げます。

続きまして、アンケートの結果について御説明いたします。資料の3ページを御覧ください。

本日御覧いただきます資料、回答結果の概ねの傾向を把握していただくことを目的に、回答の多寡を一目で分かるようにまとめております。なお回答数や割合の数値が入った詳細版については、整い次第、公表をさせていただく予定です。

初めに、教員の皆様の回答に係る全体的な傾向について、4点御説明いたします。「共通項：教員」と書いてあるボックスでございます。

まず1点目として、全体として仕事への満足感や学校での仕事の楽しさを感じられている一方、教職が社会的に評価されているとは感じておらず、給与や福利厚生、諸手当には満足していないといった回答が多く挙げられました。

続いて2点目ですが、業務でストレスを感じているのは、事務業務が多すぎることに、及び保護者の懸念に対応することの2点の回答が多く挙げられました。

続きまして3点目ですが、予算が増加した場合に優先すべき事項として、教職員の増員による学級規模の縮小の回答が多く挙げられました。

最後に4点目ですが、研修に関する設問において、それぞれの学校種に応じた内容の研修の必要性は高く感じているが、参加に当たっての障壁として、スケジュールが合わないことを共通して回答に多く挙げられておりました。

続きまして、全体的な傾向、管理職の皆様の回答に係るものでございます。その下の中ほどのボックスになります。

まず1点目として、質の高い指導の実現を妨げることに、教員の時間的、精神的余白や余裕の不足の回答が多く挙げられました。

続いて2点目ですが、業務でストレスを感じていることは、教員の皆様と同様、事務業務が多すぎることに、及び保護者の懸念に対応することに加えまして、管理職の皆様の回答では、国や地方自治体からの要求の変化に対応することが挙げられておりました。

続いて3点目ですが、諸手当に関する設問において、国や地方自治体からの人的・物的資源、地理的条件等に関する給与手当の支援を望む回答が多く挙がりました。

最後に4番目ですが、第4次教育振興基本計画の推進に当たりましては、教員のウェルビーイング向上のための働き方改革を重要視しているという回答が多く挙げられました。

次に特別支援学校、それから高等学校の皆様の回答に見られた特徴について御説明いたします。

まず左下、特別支援学校でございますが、3点。物理的な施設設備の充実や修繕の支援を重視していること、それからチームティーチングや学級・学年をまたぐ実践を挙げた意見が多かったこと、福祉機関等との連携の推進を重視していることの以上3点が特徴でございます。

続いて、右下の高等学校の特徴でございますけれども、2点。教員の皆様は個に応じた指導法を研修で重要視していること、それから管理職の皆様は教員間の連携の向上や探究や多様な学びの推進方法の研修を重要視している点でございます。

なお次の資料4ページから7ページにかけて、教員、管理職の別、また小・中・義務教育学校・特別支援学校、それと高等学校の別に大まかにポイントをまとめておりますので、参考に御覧を願います。

続きまして、アンケートに設けました自由記述欄でいただいた回答に係る全体的な傾向について御説明いたします。資料の8ページを御覧ください。

全体的な傾向ということで、まず上から順でございますけれども、この欄ですが、自由記述で、人口減少下における学校の将来像や教員の働き方、教育のあり方に関するお考え、その他御意見について回答いただいたものになります。

全体で最も多かった意見は、一番上の四角になりますが、個別最適な学びの推進や教職員の負担軽減に向けた「教職員数の確保及びクラスサイズの縮小」に関わる御意見でございました。

次に2番目に多かったのがその下の四角になります。教職員の余裕・余白の確保や資質向上・教職の魅力向上に向けた「教職員の働く環境及び処遇の改善」に関わる御意見、3番目に多かったのが、二つ目の四角の2行目でございますが、「学校の担うべき役割や業務の精選」に関わる御意見でございました。

全体として、このページの一番下に記載のとおり、教職員・支援人材などの十分なリソース確保、教職員の労働環境・処遇の改善、諸制度や学校・教育の問い直し、関係者や関係機関を巻き込んだ学びの環境づくりといった御意見が多く見られたところでございます。

なお、先ほどと同様、資料の9ページから12ページにかけて、教員・管理職の別、また学校種別でいただいた御意見の主な分類、大まかなポイントについてまとめておりますので、参考に御覧願います。

最後に資料13ページを御覧ください。

こちらは参考資料となりますが、OECD国際教員指導環境調査（TALIS）2018調査結果との比較に係る資料となります。TALISにつきましては御案内のとおり、学校の学習環境と教員の勤務環境に焦点を当てたOECDの国際調査となります。

今回実施いたしました調査につきまして、このTALISを参考としております。調査結果のうち、本日は主なポイントについて比較した資料を御覧いただいております。

なお、留意事項でございますけれども、資料の一番下の四角の囲みにも記載しておりますが、このTALIS2018、そのとおり2018年、今から6年前に実施をされ、また、対象校も公立、私立、国立の小学校及び中学校を対象としたものでございます。一方、今回実施した調査は、公立の小・中・義務教育学校に加えて、特別支援学校や高等学校も対象としたものになります。

このように時代背景や社会状況が異なること、また、TALIS調査では対象としていない

学校種の教職員にも調査を行っていること、さらには今回独自設問の追加や設問内容の修正を実態に合わせて行っておりますので、TALIS 調査における全国平均数値との単純比較はできないため、あくまでも参考資料としての取扱いということで御覧いただければと思います。

また、特にこの資料中、グレーに塗りつぶしてある部分が2か所ありますが、「あなたの学校の業務に関して以下のことはどの程度ストレスに感じますか」、この質問につきましては、※2に記載のとおり、回答値の基となる選択肢の指標が、今回実施しました調査と TALIS 調査とは異なっておりますので御留意をいただきたいと思っております。

なお、教員向けのアンケート集計結果の全体版につきましては、お手元の資料1の別添①、さらには実際に調査を行ったアンケート調査の項目については、資料1の別添②として配付しております。

なお、集計結果について、回答数や割合の数値が入った詳細版のほか、必要に応じて分析等を加えていくことを検討しておりますので、御承知おきいただければと思います。

説明は以上でございます。

○荒井座長

ありがとうございました。

皆様から御協力をいただいたアンケートの結果について共有させていただきました。

アンケートの結果の受け止めや所感など、いかがでしょうか。

では、畠山委員お願いします。

○畠山委員

私は上田の学校に勤めているんですけども、上田市もアンケートに協力ということでやらしていただきました。

校内の先生方とも話をしているんですけども、とにかくやはり今は忙しいということだったり、本当にここに書いてあるとおりにかと思っています。そこにプラスして、やはり保護者との対応にかなりの時間を割いている部分があります。業務が終わり、夕方の時間からの保護者との対応だったり、子どもたちのことについての支援会議などあり、確かにこのとおりにかかと思っています。

それから、やはり各クラスに配慮を要する生徒もおりますので、ここに書いてあるとおり、教職員の増員だとか補助的な職員の増員については、日々私たちも学校の中で感じているところであります。あともう一人いればというところで、誰かがこのところを見てくれればというところは感じるところでありますので、おおむねここに書いてあることでかけ離れていることはないと感じています。

○荒井座長

ありがとうございます。

三輪委員、いかがでしょうか。

○三輪委員

私どもの松本市の学校でも回答に参加をさせていただいております。

この結果を見て、教員・管理職共に、教職は社会的に高く評価されていると思うという項目の数値が非常に低くて、全国学力・学習状況調査の中で、子どもたちの自尊感情などがなかなか伸びずに、現場でも本当に工夫をしながら大事にしているところと何か重なるような気がして、やはり私たち学校で働く、いろいろな立場で働く大人が生き生きしている姿や、この仕事が楽しいという姿を子どもたちに何とか見せないといけないなというところを強く感じています。

それに関わっても、やはり先生方の時間をどう生み出すかは、私たち管理職の立場でもさらに考えていかなければいけないと思います。手前味噌ですが、本校も下校時間を早くしたことで話し合う時間がたくさん持てるようになり、教職員も以前よりは元気になってきているのかなと感じておりますし、学校に足が向くようになってきている子も多いかと思います。

何とか皆さんの力も借りつつ、私たちもいろいろな工夫をしていって、さらに一步、働く環境、子どもたちの教育環境の改善を進めたいと、この結果からも感じているところです。

○荒井座長

ありがとうございました。

柳沢委員、いかがでしょうか。

○柳沢委員

今日はオンラインで失礼します。よろしく申し上げます。

高校の関係ですが、全県の校長会に依頼をしまして、管理職は全部の高校に依頼をしました。また、先生方については、学校種、学校の規模、そういうものを考慮しまして、バランスよくということで先生方から回答いただきました。

結果について、東北中南信4地区の校長会で情報共有をさせていただいた結果の概要をお見せいただいて、その上で意見を出し合ったんですけれども、おおむね回答としては、どの先生方もやはり予想していたとおりでという回答が多かったです。

先生方も管理職もそうですが、多忙感是非常にある中で、もっとこういうことをやりたいという思いは非常に強いんですけれども、その一方で、教員不足により一年中いろいろなところで人集めをしていると。場合によると、他県の空いている先生を連れてきて、何とかお仕事していただいている状況があって、やはり人がもう少しあればとか、そういうような考えの中でやっている状況が共通して見られました。

ただ、やりがいの部分、この仕事に対する誇りの部分は先生方も管理職もやはり感じていて、何とかそういう思いをいい形で実現していければという感想を持っています。

○荒井座長

ありがとうございました。

浦野委員、いかがでしょうか。

○浦野委員

このアンケート調査で一つだけ確認をしたいことがあるんですけども、特別支援学校の2番目に「T・Tや学級・学年をまたぐ実践が多い」とあるんですが、これはどのような意味合いのものか、確認をさせていただきたいです。

○丸山課長

これは、チームティーチングや学級・学年をまたぐ実践を重視する回答が多かったという意味でございます。

○浦野委員

分かりました。ありがとうございます。

特別支援学校の特徴でもあると思いますけれども、仕事への満足感という点では、特別支援学校は比較的高いかと思っております。たぶん小学校・中学校も同じかと思うんですけども、教員を目指す方々は、学校で教えたり、授業を改善するとかそういうことに関しては、とても意欲的ではないかなと思います。

また、今、私は教育学部に勤めさせていただいているんですけども、学生も、教育実習に行ったときには、とても楽しかった、充実している、ぜひ教員になりたいという希望を持っています。実際に教員採用試験もたくさん受けているんですけども、現場に行くと、今1年目、2年目の本学の卒業生等から話を聞くことがありますが、大学生で現場に行ったときとの違いとして、事務業務が大変多い、こういうこともやらなければいけないんだなということをととても感じているという話をしています。

特別支援学校でも、例えば就学奨励費というものがあるんですけども、そのための細かいお金を集めて、保護者の方からレシートを集めて出さなければいけない業務があり、やはりそういった業務を教員がやるということはなかなか想定をしていないと思います。現場に行ったときに事務的なもの、たぶん学級会計とかもそうなんですけれども、本来は別の方にやっていただければいいなと思われるところがあるかなと思います。

ですので、教員、管理職共に、共通項の中で事務業務が多いということは出てきているんですけども、確かにそのあたりは改善をしていかなければいけないと思います。教員が教える業務等に集中できる環境が整えば、力を発揮してくださる方がとても多いんじゃないかなと思いますし、大学生の中でも、実は今、他県でも教員採用試験に応募する方が少なくなっていて、2次募集をしているような県もあって、他県の方が受かりやすいような状況が出てきております。その中で教員採用試験に他県で受かって、長野県の教員になりたいという学生がいます。

そういった学生に聞くと、長野県の体験的な学びはとても魅力的で、自分たちはそういう教えの中で育ってきた。そういった環境の中での学習を子どもたちにぜひ実践していきたいということを思っていて、授業を実践する面に関してはとても意欲があるということも思いますので、このアンケートにもあるように、そこに集中できるような環境を整えるということがすごく大事になってくるんじゃないかなと感じております。

○荒井座長

ありがとうございました。

それぞれの学校種ごとに関わる委員の皆様の御意見、所感をお聞きしました。実態をある程度反映した結果が出ていると思いますけれども、私個人としては、この状況がずっと続くとは限らないという危機感を持っています。やりがいは持続可能なものではないので、それに沿う働きやすさの観点での施策展開も必要ではないかなと思います。現場からの悲痛的な叫びとも取れる部分も自由回答記述等に多々記載があります。ぜひ御参照ください。

続きまして、関係団体との意見交換の結果についてであります。先ほど來說明させていただいておりますとおり、7月30日にメッセージを発出した後、様々な関係団体との意見交換を行ってまいりました。

資料2を御覧いただいた上で、まず、事務局から説明をお願いいたします。

#### ○丸山課長

それでは、関係団体との意見交換の概要につきまして御説明をさせていただきます。資料2「教育関係団体との意見交換の概要」を御覧ください。

今、荒井座長からお話ありましたとおり7月30日に信州学び円卓会議から発信をいたしましたメッセージの内容を踏まえまして、様々な主体における学びの「新しい当たり前」を共に創る取組につなげていくことを目的に、8月から10月にかけて、教育や学びに関わる16の関係団体の皆様と意見交換を実施してまいりました。御協力をいただきました関係団体の皆様、また、円卓会議委員の皆様におかれましては、この場をお借りして御礼を申し上げます。誠にありがとうございました。なお、実際に実施をした団体につきましては資料に記載のとおりでございます。

意見交換の際にいただいた主な意見は、資料2の2ページ以降、各団体ごとにまとめているとおりのとおりとなります。なお、資料に掲載されている意見は、各団体の総意ではなく、あくまでも参加者個人の意見となりますのであらかじめ御了承願います。

本日は、その中で複数の団体から共通して出された御意見、簡単に言いますと多かった御意見をいくつか御紹介したいと思います。それにつきましては、資料2の一番最後にお付けしております補足資料を御覧いただきたいと思っております。右肩に「資料2補足資料」と記載されているページでございます。

まず、メッセージを受けての所感でございます。

メッセージに込められた思い、方向性についてはおおむね共感できるといった御意見を多く頂戴した一方で、2つ目のポツですが、具体的に何をするのか、学びの「新しい当たり前」とは何なのかといったことがイメージしづらいといった御意見もいただきました。また、このメッセージを学校の教職員の皆様はもちろん、県民の皆様により広く発信していくべきといった御意見もいただきました。

次に、メッセージを踏まえた取組の充実に向けて重要なことではございますが、このページの下の方に記載のとおり、大きく4点ございました。

1点目は、教育条件の整備についてでございます。具体的な御意見の記載がなくて恐縮ですが、主な御意見を御紹介いたしますと、メッセージの内容を進めるためには予算の増額や人的配置の充実は必要。それから、先生たちにも、このままでいいのか、できるならこうしたいという気持ちはあるので、教員同士が議論できる時間や場のゆとりが必要。ま

た、今のへき地手当では、へき地校勤務者は費用の持ち出しが増えるので、中堅世代が赴任を希望できず、教職員の年齢構成や非正規率に偏りが生じているといった御意見をいただきました。

次に2点目は、様々な関係者が連携して子どもの学びを支えることについてでございます。こちらにも具体的な御意見を記載していませんが、口頭で御紹介しますと、学校での学びを校内だけで閉じずに、他校の子どもや地域の方と学び合う場があることが重要。校種を超えて学びの事例を共有することが重要。子どもの学びの育ちの保障として、幼保小連携は大切といった御意見、さらには学校外の学びの場と学校とで相互交流の機会が欲しいですとか、教育という分野は親と先生だけの枠組みでは限界がある、地域や企業なども巻き込む必要があるといった御意見をいただきました。

次に3点目でございます。子どもの声や当事者の声に耳を傾け、思いを尊重することでございます。これについては、子どもが感じていることが大人に伝わっていると実感できることが必要といった御意見や、他の人とは異なった意見でもいいから、子どもの意見を聞いてもらいたいといった御意見をいただきました。

最後に4点目、これまで培ってきた信州教育の魅力をさらに引き出す学びでございます。具体的には、先生方のこれまでの知見や経験の上に積み上げることが大事といった御意見や、これまで信州教育が大切にしてきたことの中に「新しい当たり前」をつくり出すヒントは存在しているのではないかと。また、長野県が教育県と呼ばれた背景として、明治期以降全国に先駆けて教育条件整備を進めた点がメッセージに書かれていることは重要といった御意見をいただきました。

以上、複数の団体の皆様から共通して出された御意見の中から、大きく4点御紹介をさせていただきます。

今回の関係団体の皆様との意見交換会では、まずはこの信州学び円卓会議の活動であったり、7月30日に発信したメッセージを御認識していただけたことが成果であったと考えております。

その上で自分ごととして取組を進めていくという機運をさらに高めていくには、引き続き、関係団体の皆様はもちろん、学びの関係者や、より多くの県民の皆様がこのメッセージをお届けし、目指す方向感を共有していくことが重要と考えております。

説明は以上でございます。

#### ○荒井座長

ありがとうございました。

篠田委員や大久保委員、また大日方委員は、今回この意見交換にもご参加いただきましたが、大日方委員、いかがでしょうか。

#### ○大日方委員

信濃教育会は、やはり先生方の職能向上ということを大事にしております、学校・先生方の実践を支援する立場で事業を進めておるわけでありまして。今回この円卓会議から示されたメッセージの中には、子どもたちが学校でやりたいことを支えるとか、教員や学校がチャレンジしたいことを支えるということで、学校、先生方のこれからの実践に対して

後押しをしていこうというメッセージを発出していただいておりますので、私たちも円卓会議のメッセージについて意見交換したときには、かなり多くの先生方が、ありがたいなという受け止めをしていたように思います。

これまでいろいろなメッセージ等が出されてきたわけでありましてけれども、やはり今回は、県と県教委が一緒になっていることで、県の本気度が違うなという受け止めをしているのではないかと思います。今まで当たり前で過ごしてきたことをもう一度振り返ることで新しいことにチャレンジし、そのことが当たり前になっていく、そんな教育をつくっていこうという方向については我々も賛成しておりますし、その一翼を担わせていただければと思っているところでございます。

○荒井座長

ありがとうございます。

では、大久保委員、いかがでしょうか。

○大久保委員

私も会議に参加させていただいて非常に感じる事とか共通することでありましてけれども、2点あって、1つは教育の環境整備、全体で整備をする部分。先ほど言った先生の働き方ですとか、時間の問題ですとか、いろいろな体系の問題。これについては全体を整備する必要があるということと、あとは、やはり個々で特色ある学びをどうつくっていくかというのは地域の大きな課題になってきますので、そこをどう取り組んでいくか。この2つをやはり併せて整備していく必要があるという形で、特に2つ目に言った部分、個々の特色ある学びをどうしていくかということが、私たちがこれから非常に重要にしていききたいなと改めて感じたところであります。以上であります。

○荒井座長

ありがとうございました。

では、オンライン参加の篠田委員、いかがでしょうか。

○篠田委員

お願いします。8月の第1回目の意見交換会ということで、信州フリースクール居場所等運営者連絡協議会の意見交換会に今回参加をさせていただきました。

私もその協議会に会員として入らせてもらっているんですけども、この協議会はとても多様なスタンスの方が多くて、居場所とかフリースクールを運営されている方の中に、例えばお子さんが不登校で当事者の方、不登校当事者で御自身で居場所を立ち上げているような方、それから教育関係を経て居場所やフリースクールを立ち上げているような方など、本当に多様なスタンスの方たちがこの会に入っていて、今回このメッセージを受けて、とても皆さん熱い思いで意見交換会に参加されていたなというのがすごく印象にあります。

中でも「こどもまんなか」をすごく重視されている声が多くて、特に不登校の子たちは、マイノリティーというか少数派だったり、学校からは見えにくい特性を持ったお子さんたちで、フリースクール・居場所に通ってる子が多いので、そういったところで、今回この

メッセージを基に子どもたちの生の声や子どもたち自身が会議に参加をしたり、体制・制度を変えていく、つくっていくという側に回っていきけるような、そのような機会が必要という意見はとても多かったと思います。

あともう1つは、学校や行政と具体的にどんな連携をしていったらいいかということで、行政や学校に限らないんですけれども、関係機関といかに横につながって多様な学びをつくっていくかという具体策について、どうすればいいかという意見も出ました。

あわせて、居場所運営者同士の団体間の連携を深めて、一緒にワークショップを行ったり、子どもたち同士のつながりや絆を深めていく、その声を広く発信していくことも大事にしたいというようなことで、そのような意見が出たかなと思います。

#### ○荒井座長

ありがとうございました。

この間、16団体との意見交換を急ピッチで行ってまいりましたが、皆さんお時間をつくっていただいて、本当にありがとうございました。今後は、「共に創る」という観点の取り組みが求められていると思っています。

それでは次に参ります。

信州学び円卓会議の、今後のあり方について事務局から提案をいただきます。

では、事務局から説明をお願いいたします。

#### ○松本参事

県民文化部参事、学び支援担当をしております松本と申します。どうぞよろしく願いいたします。

それではお手元の資料3をお願いいたします。「実行フェーズにおける信州学び円卓会議の進め方（案）」を御覧ください。

まず、資料の右側を御覧ください。令和6年度、今年度ですけれども、これまでの議論に基づくメッセージを発信をしまして、県民の皆様と方向性を共有させていただいたところであり、これまでの円卓会議や県民意見交換会を通じまして、長野県の教育や学びに係る課題や論点に関しておおむね議論をしてきたと考えております。

短期間で幅広い課題解決に向け一定の方向性を出していただきましたこと、荒井座長をはじめ委員の皆様、本当にありがとうございました。

令和7年度でございますけれども、これまでの議論を実行へと移していくことが求められていることから、県民の皆様と共有した方向性に基づきまして、様々な主体が当事者意識を持ち、連携・協働しながら具体的な行動を起こしていくことが重要になると考えております。

そのため、今後は様々な主体の連携・協働の促進や取組状況の発信、また学びの「新しい当たり前」を共に創るための取組を県下に拡大していくことを目指してまいりたいと考えております。

資料の左側を御覧ください。今後のスケジュールでございますが、本日10月16日の第5回信州学び円卓会議の開催後、来年1月ぐらいに実行フェーズにおける信州学び円卓会議の進め方、またこれまでの信州学び円卓会議の議論の成果に関連した来年度の県の当初

予算項目に関する御説明を目的とした運営委員会を開催したいと考えております。

続いて、県民の皆様、教育関係団体の皆様、これまで意見交換に参加いただいた皆様を対象にしました「学びの『新しい当たり前』を共に創る」のメッセージの共有と、また様々な取組主体の皆様の交流を目的としたフォーラムのようなものを来年2月ぐらいに開催をしたいと考えております。

委員の皆様にはまた御協力をお願いする場面もあろうかと思っております。その際にはよろしくお願いたします。

続きまして、次のページをお願いいたします。来年度の会議の進め方についてでございます。

R7年度の円卓会議のミッションは、繰り返しになりますが、これまでの議論を実行へと移していくこと、また教育や学びの現場に関わる様々な主体の皆様が当事者意識を持ち、連携・協働しながら具体的な行動を起こしていくことが重要であるため、様々な主体の連携・協働の促進や取組状況の発信等に取り組み、県民の皆様全体の機運醸成を図ることと考えております。

このため、事業内容としましては、取組及び成果の共有、相互の意識の高揚、連携・協働の促進、また県民の皆様への取組の発信、それから県民全体の機運醸成を図るため、取組状況の確認をする会議であるとか、教育や学びの現場に関わる主体を対象としたフォーラムのようなものを開催することを考えております。

実行フェーズにおきましては、発信したメッセージを浸透させていくため、引き続き本日お集まりの信州学び円卓会議の皆様には委員として御協力いただくとともに、あわせて、教育や学びに関わる関係団体の皆様にも協力を依頼してまいりたいと考えております。

なお、実行フェーズにおける信州学び円卓会議の進め方につきましては、もう少し具体的なものを委員の皆様にも事前に御意見を頂戴しながら、来年1月ぐらいに開催予定の第4回運営委員会においてお諮りをさせていただきたいと考えておりますので、引き続きよろしくお願したいと思っております。

事務局からの説明は以上です。

#### ○荒井座長

ありがとうございました。

簡単に概括をしますと、次年度以降はメッセージを軸とした取組状況のフォローアップを行うとともに、フォーラム等を開催し、具体的な取組に対して情報共有すること、共に創っていく感覚を持ちながら、当事者意識につなげていくということをしていきたいなど思っております。

### 3 意見交換

#### ○荒井座長

この後、意見交換になりますが、7月末に発信したメッセージを踏まえて、知事、教育長からも決意表明をいただいております。参考資料2を御覧ください。

関係者一同、期待感を高めているわけですがけれども、教育長、知事から、今後の見通し

や意気込み等を改めてお聞かせください。まず、教育長からお願いできますでしょうか。

○武田教育長

それでは、参考資料3を御覧いただきたいと思います。

県教育委員会として、新しい当たり前を創っていくということで、今日は2つのことを御紹介したいと思います。

その1つは、ウェルビーイングの実践校をつくるということでございます。この実践校をつくるに当たって、関係者というか、先行してやっている方とか大学生や大学教授などで、検討委員会会議を設けました。その中でネーミングが大事だということで、「今までの県教委とはずいぶん違うよね」とアピールできる名前をつけろという非常に難しい質問注文をいただきました。五つほど候補を考えていただいて、それを県教育委員会事務局の職員、教員も事務の方々行政職もいるんですけれども、その方々職員に投票していただいた結果、第1位になったのは「TOCO-TON（トコトン）」でございます。

私とするといいのかなというイメージがありましたが、つけてみると意外といい名前です、NHKの記者さんからは、「思いのほかいい名前をつけましたね」とお褒めの言葉をいただいたんですけれども、この「TOCO-TON（トコトン）」をつくっていくということでありまして、県内で10校ほどを目標にしています。

これはどんな学校かという、右側に取り組むことというのがございますけれども、学校の仕組みを変えていくことが大きなテーマになります。今までの県教委の取組は、授業を変えることを大きなテーマとしてやってきたんですけれども、授業を変えるというよりも学校の仕組みそのものを変えていくということです。

例えば、子どもは教室に入って45分間先生の言うことを聞かなければいけないのか、教室で国語の教科書を開かないと国語の授業はできないのか、大人が決めたルールに従うのが学校の生活なのか、そういったことをもう一度根本から考え直して、本当に子ども中心の学校とはどんな学校なんだろうということに挑戦していく学校でございます。

そこでは学校の仕組みを変えていきますので、教員の働き方も変わってくるのではないかと考えています。今まで教室に45分間子どもを入れるためにどうするかという会議を延々とやってこなかったか、子どもたちに大人が決めたルールを守らせるために会議をしてこなかったか、そういうことも含めて、働き方改革を進めてまいりたいと考えています。

ここではもう1つ、10校もしくは10市町村教育委員会、数校で応募してくるところもあるだろうし単独で応募してくるところもあると思っており、10団体と考えていますけれども、大きなことはその学校の取組を県教委と市町村教育委員会がバックアップすることです。

県教委は、これらの学校群に対して伴走支援をしていくということで、3ページを御覧ください。

県教育委員会では、学校改革支援センター（仮称）をつくりたいです。これは岩瀬委員からも提言がありましたが、今まで県教育委員会の指導主事という、指導をし、評価をするというイメージがありますけれども、そうではなくて、学校の先生たちと一緒に学校づくりをしていくことを目指しています。

その「TOCO-TON（トコトン）」の学校、もしくは市町村教育委員会にも教員を配置して、

その方々と共に創ってまいりたいと思っています。

2ページには募集要項を載せてあります。11月7日にはいくつかの学校が出てきてほしいですが、今のところいくつか反響がございますので、いいんじゃないかと思っています。

もう1点は4ページであります。長野県の小・中・特別支援学校では、教育課程研究協議会というものを、昭和36年からですからもう60年以上やっているんですけども、これは学習指導要領を授業レベルで語り合っていくということで、これを通して教員が確かに力をつけてきたという事実もあるんですが、近年この協議会が先生たちの負担になっていたり、学校づくりの妨げになっているようなことをお聞きをするところでもあります。

自分が力をつけていく営みである教育課程研究協議会が負担になっていたら、全く先生たちのためにならないだろうと考えまして、もう一度これを廃止を含めてゼロベースから考えてみようということです。

とりあえず来年度は1年間実施せずに、どういうことをしていけば教員が力をつけられるのだろうかということを、現場も含めてもう1度教員が検討し合う、話し合ってみたいと思っています。これも「新しい当たり前」をつくっていくための1つの取組であります。

そんなことで今日2つのことを紹介しましたが、1番は学校現場の先生方や、学校に変われと言う前に、県教育委員会が変わっていこうとしているんだということを強くアピールすることによって、学校現場の方々も変わる勇気というか、力が出てくるんじゃないかと思っています。

○荒井座長

ありがとうございました。「とことん」ではなくて、「TOCO-TON（トコトン）」ですね。

○武田教育長

学校名は「TOCO-TON（トコトン）」です。研究とか実践を「とことんやっていく」ということで、「TOCO-TON（トコトン）」ということをお願いしたいと思います。

○荒井座長

ありがとうございました。円卓会議で議論してきた教員の自主性・主体性を軸としたチャレンジを教育行政としても応援していく部分と求められている働き方改革という、両立が難しいとされる部分に県の教育委員会もチャレンジされるということでありたいです。

また教育課程研究協議会については、長野県教職員組合からも、この間提言等をいただいていた内容に沿うものであると思っています。

知事からもコメントをお願いします。

○阿部知事

荒井座長をはじめ、メンバーの皆様方には、この間様々御議論いただき、またいろいろな団体の皆さんとも意見交換していただいていることに、感謝申し上げたいと思います。

私もいくつかの団体との意見交換をさせていただいたわけですけども、まず、決意を述べよという話ですので、まさに武田教育長とこの7月30日付けで出させていただいた

「学び・教育改革に臨む私たちの決意」というものをしっかり踏まえて対応していきたいと思っています。

まさに円卓会議で出していただいた「新しい当たり前」を信州からつくと、言うのは簡単ですけども、やるべきことはたくさんあるし、非常に多くの関係者の皆さんと意見を共有していかなければ実行できないのではないかと思いますので、ここからが重要だと思っています。

この決意の1番最後に「このように改革を推進していきます」と2点書いてあるんですけども、「市町村、市町村教育委員会、学校長、教員、PTAなど、子どもの学びに関わる教育関係者と改革の方向性を共有する」、それから「それぞれの立場で『新しい当たり前』は何か、その実現に向けてどのような取組ができるか検討いただき、共に改革を推進していく」、こうなんだと思います。

先ほど教育長からは、教育委員会としてまずは自分たちが変わるんだというお話がありましたし、私も知事としては、まずしっかり予算をつけないといけないという思いもありますし、もう1つは、政治家として、先ほどのアンケートを見ると保護者への対応が大変だとか、あるいはもっと国に対しても言うべきことは言っていないといけないと思いますので、私は私としての役割をしっかり果たさなければいけないと思っています。

意見交換も、いろいろな団体いくつかとさせていただく中で私が感じているのは、やはり現場の人たちは、なかば諦めモードに入っている人が多いのではないかと受け止めているところがあります。どうせ言っても変わらない、どうせ検討会をつくったって少し変わるだけじゃないのと思われてしまっているんじゃないかなと思います。

それだと長野県全体のパワーが出ないので、ぜひ今日のメンバーの皆さんも含めて、いろいろなメンバーの皆さんが、やはり今のままの教育ではいけないんだと、もっと変えていかなければいけないということを、共通認識が持てるように我々も工夫していかなければいけないのかなと思います。

その一方で、一定程度今までの教育ももちろん意義があると考えますが、やはりここが問題だと思うんですけども、誰かが何かをしてくれるとか、誰かが何かを変えてくれるとか、それを待っているとたぶん変わらないと思います。

やはり全ての人たちが、武田教育長は武田教育長、私は私で責任と役割を果たしますけれども、学校の校長先生方も、市町村教育委員会の委員の皆さんも、あるいは学校現場の先生方も、あるいは保護者の皆さんも、地域の皆さんも、同じ方向を向いていかないと変わらないと思うので、そういう意味では、ここからが本当の正念場なんだろうなと思います。

今後の進め方は、関係者全てが自分ごととして取り組めるような環境をしっかりとつくっていかないといけないんじゃないかと。教育は誰でも評論家になれてしまうところなので、評論家にならないで主体になっていくということを多くの人たちにお願ひしていかなければいけませんし、何が問題なのかということをもっと突き詰めた上でしっかり共有することが重要ではないかなと思います。

今回のアンケートは、これからの取組にとって非常に重要な要素がたくさん入っていると思いますが、アンケートをただ共有するだけではいけないのではないかなと。例えば事務的業務が多過ぎるというのは、たぶん多くの人たちがそうだよねと思っているんで

すが、それは一体そもそも何なんだということで、先ほど就学奨励費の事務も大変だという話もありましたけれども、もっと具体的なレベルで何が課題なのかということをご共有させていただいて、それは市町村の教育委員会が課題なのか、県の教育委員会が問題なのか、文部科学省が問題なのか、あるいはほかに要因があるのか、そこら辺もちゃんと突き詰めて変えていかないといけないと思います。

また、今回のアンケート等も踏まえると、考えなければいけないことは、学校の先生は本来何をやるべき存在なのかということだと思います。何でもかんでも学校にやらせ過ぎなんですよ。我々も、とかく何かいろいろ問題があると、「じゃあ、学校で何とか教育やりましょう」と、例えば世の中全体が金融教育だとか、環境教育だとか、何でもすぐ学校教育、学校教育と。学校で本来やるべきことと、学校以外のリソースも活用してやらなければいけないことと、もっと明確に分けていかなければいけないんですが、そこがやはり、今までどうしても教育委員会、学校というその縦の系列でいろいろな物事が行われています。

私は率直に言って学校で何が行われているかよく分からないんですよ。とはいえ学校に期待することがたくさんあって、それがこのアンケートに出ているように、国や地方公共団体からいろいろなことを言われて困ってしまうという話になっているので、そういう意味ではもっと学校の先生方といろいろな人たちが対話をする。本当に困っていて、学校レベルでもやらなければいけないし、もっと県全体でもそういう議論をいろいろな場で行っていくということが必要です。そうしないと本当に分かり合えない。

学校の先生方も一生懸命やっているんですけども、社会が何を求め、どういう期待をされているのかというのは、やはり主体的に分かっていただいた上で学校現場の教育に生かしてもらわないと、今までは、よそからこういう教育をやりなさいとか、あるいはどこからかこんな教育が必要だと言われてやっているのだからただの多忙感になって、学校の先生にもっと社会を知ってもらって、社会ではこれが必要だからうちの学校では子どもたちにこういうことを教えるということを主体的にやらしてもらえば、たぶん同じことをやっても、負担感とか多忙感というところは違ってくるので、それには学校の先生方にももっと幅広く社会を見てもらう、知ってもらう、そういう経験を持ってもらうということも必要ではないかなと思います。

あと、団体の皆さんとの意見交換の中で出てきている話で、あまり論点になっていない話として申し上げれば、子どもたちや児童生徒をもっと主体的に議論に参加させなければいけないんじゃないかなということ強く感じています。やはり一番の当事者は子どもたちなので、児童生徒が一体何を期待しているのか。特に学校の先生との関係で何を困っているのか、何を学校の先生にしてもらいたいのかという、当事者としての子どもたちの声というものをもっと我々も聞かなければいけませんし、むしろ議論にもっと主体的に参画をしてもらうほうが、より子どもたち中心の教育、学びの議論ができるのかなと思います。

とりとめのない話になってしまっただけで申し訳ないですけども、まず私も県知事という責任ある立場として、決意表明した方向性でしっかり対応し、取り組んでいきます。それと同時に、あらゆるステークホルダーが主体的に取り組んでもらえる環境をどうつくるかということが重要な課題だと思いますし、子どもたちも、ぜひ当事者としてこれからの取組

とか議論に参加をさせていく必要があると考えています。

もう1つは、学校の先生方も、どうしても閉じた世界にいると外からいろいろ言われてしまう立場になってしまいますので、むしろ学校の先生も地域に出てもらったり、あるいは広い世界を経験してもらおう機会をつくって、そうした中で学校の先生たちがまさに主体的に教育のあり方を考えていけるようなバックアップしていくということが、このアンケート等を見て、私が感じた重要な視点かなと思っています。

長くなりましたけれども、よろしくをお願いします。

○荒井座長

ありがとうございました。継続して要望の多い教員の処遇という部分についても期待していいでしょうか。

○阿部知事

処遇の在り方については教育委員会で今検討されていますので、教育委員会からの要求を踏まえて私のほうではしっかり対応していきたいと思っています。そもそも国全体で処遇改善の議論がされていますし、へき地手当の問題もかねてから町村議会からもいろいろ問題提起をいただいているところでもあります。加えて私も県民の皆さんとの対話集会を各市町村を回って行う中で、教員配置のあり方、これもいろいろところで御指摘をいただいているので、いっぺんに100点満点の答えを出せるかどうかというところはありますけれども、確実に改善できるように、教育委員会と一緒に取り組んでいきたいと思いません。よろしくお願ひいたします。

○荒井座長

ありがとうございました。

残りの時間を使って、委員の皆様からもコメントをいただきたいと思っております。

例えば、岩瀬委員からは先ほどの学校改革支援センターに対する受け止めを、また竹内委員、草本委員からもご発言をお願いします。

また、それぞれの取組主体に対する今後の期待感、あるいは実現に向けた具体的な方策について、資料4にこれまで出た意見を入れさせていただいておりますので、こちらも目配せいただきながら御発言いただけたらと思っています。

では岩瀬委員、いかがでしょうか。

○岩瀬委員

よろしくをお願いします。今、武田教育長と阿部知事のお話を聞いて、結構胸が熱くなっています。まず教育委員会から変わっていくということで、教育課程研究協議会をゼロベースで見直そうというのはすごく大きいことで、なかなか自治体とかができることではない。そもそもから変わっていくんだというメッセージは、現場への力強いメッセージだなと思いましたし、知事がおっしゃっていた「新しい当たり前」をみんなが当事者になってみんなで作っていくということ、まさにそこだなと思います。

よりよい学校の形は事前には分からないという前提に立ったほうがよいなと僕は思っ

ていて、新しい当たり前の学校の形、それは新しい社会の形とつながっていくんじゃないかなと思うんですが、それを何か現場レベルでボトムアップでそれぞれ試行錯誤する。そのことをとことん応援し、こんな形がいいんじゃないかということをそれぞれが試行錯誤していくことで、みんなが当事者になっていくというプロセスになっていくんじゃないかなと思いつきながらお聞きしていました。

画面共有してもいいでしょうか。全体をお聞きしていて雑感からですが、中山間地域の強みを生かして新しいチャレンジが広がるようなための継続的な支援とかサポートは必要だなと思っています。

根羽村のほうに一度お邪魔させていただいて、あそこにあるポテンシャル、小規模ならではの、中山間地ならではの強みやポテンシャルみたいなものをたくさん感じました。そこで新しいチャレンジをするためには、ただ加配をつけるとかではなく、その実践を継続的に支える仕組みが必要。これは後述しますが、学校改革支援センターの役割は大きいなと考えています。

あと知事がおっしゃっていたように、みんなが創り手になる。そして子どもこそが創り手になって参画していくということは、このメッセージが本当に実装されていくためのキーになると思っています。

先日、風越学園に、松本市の研修センターの方、指導主事、そして現場の先生たちが15人ぐらいいらっしゃったんですが、半日学校を参観して、どんなことを感じたり考えたりするかという振り返りの場を持ったんですね。その振り返りの場に、たまたまそばにいた中学生2人に来てもらって、今から大人たちがどう感じたかをしゃべるので、それをどう聞いたか指導・講評してくださいと、中学生が指導・講評する場をつくったんです。

大人たちは学校をどう変えていったらいいのかとか、子どもを評価するという視線が子どもを縛っているんじゃないか。実は自分たちも評価される時点で実践ができなくなっているんじゃないか。子どもがもっと自由に意見を言えるようになるにはどうしたらいいかみたいな逡巡が先生方から語られたんですが、それを聞いていた中学校1年生が、最後の指導・講評場面で、「皆さんの話をお聞きしていて、先生方って過保護だと思いました。もっと子どもに任せれば自分たちでやっていくのに、先回りしてやることで、過保護になり過ぎているんじゃないか」、あるいは「コミュニティがつくられていくので、自分たちで新しいものをつくっていくコミュニティこそが大事で、コミュニティをつくるということをまずやったらどうか」みたいなことが子どもたちから語られて、先生方は「うーん」と結構うなる時間だったんですが、子どもたちの中にはこうしたい、こうなるといいという思いとか、実感を持って手元にあるはずなんですよ。その声をちゃんと聞きながらつくっていくということ、これをどうやったら実装できるかというのは本当に大きいテーマだなと考えています。

第3回の円卓会議で、学校改革支援センターを提案させていただいたんですが、今回それが本当に実装されるということで、なんかとてもとても期待しています。結局教育が変わっていくということは学校現場の実践が変わっていくということなんですね。現場の先生たちがエンパワーされ、支援され、学校が支援され、サポートされ、そこでとことんチャレンジできること。必ず現場から変わっていくので、そこを徹底的に支援するセンターをつくるというのは、本当に大きい取組だと思っています。

ただ、これが機能するかは次の大きい課題で、つくってはみたものの今までの指導型の支援をしていては、結局現場は支援センターの人たちが来るたびに緊張するとか、冷えるみたいなことが起きてしまう。ではどのようなセンターになったら本当に現場がエンパワーされるかということを、次のフェーズでは真剣に考えたいという気持ちです。

これは僕自身の改革支援センターへの期待ですが、1つはセンターの組織自体がメッセージになるなと思っています。今までの研修センター、あるいは教育委員会とは全然違う組織形態だとか、全然違うアプローチだということが、その組織そのものから見える。「センターの人にぜひ関わってほしい」、「センターの研修に行ってみよう」というふうに先生たちがエンパワーされるような組織に見えるかどうか。それが1つの大きい鍵だと考えています。

縦割り型の組織から脱却できるか、組織のあり方自体がメッセージです。例えばセンター内でやられるミーティングであるとか、センターに集まってきた人たちとのコミュニケーション、そこで行われる研修自体が、研修会の展開に基づいた新しいものになっていくようにすることが、1つ目の鍵だと考えています。

センターがこれからやっていく伴走型支援であったり、そこで行われる研修、あるいは学校への研修デザインの支援そのものが、教育や学びのあり方の転換の直接的なメッセージになると思うんです。今までのような指導型、指導要領ではこう言っていますよという支援だったり、あるいは研究授業で指導・講評するという形ではそうはならない。ではどのような伴走支援の形が一番現場の力になって、先生たちがエンパワーされ組織が変わっていくのかということを考えられる組織になっていくといいなと思っています。

そして、その結果としてどれだけ最前線の現場の自由度が上げられるか、ボトムアップを徹底的にサポートするために何ができるのかということを考えているなと思っています。

そのためにやれることをいくつか考えてみたんですが、1つは教師教育、いわゆる大人の学びであったり、研修そのもののデザインであったり、あるいは学校伴走の専門家になっていける。そのために、その業務に集中できるような業務整理をして、支援センターに関わっている方々も徹底的にその支援が主業務なんだというような形になる。そのためにはどうしたらいいかということは考えていただきたいなと思っています。

2つ目は、本当に継続的な支援、訪問、伴走ができる体制をつくれるかどうかです。やはり年間に1回2回の訪問では、継続的な支援とは言えないと思います。私が東京学芸大学の教職大学院にいるときに、大学院で少し時間もできたので、いくつかの学校の校内研修、学校研究の支援をしたんですが、そのときは結構僕自身も自由度があったので、2か月に1回学校を訪問するとか、少し見に来てほしいといったらばっと行くとか。研究主任の人と ZOOM でミーティングして次の研修の相談をするとか、そのように継続的に1年なり2年なり、本当に伴走し続けるような体制をつくれるかどうか、というのは結構大きいのではないかと思います。

繰り返しになりますが、年間1回、2回の訪問、あるいはそこで検証するだけでは、なかなか本当に学校が変わっていくことの伴走はできないのではないかと思います。

3つ目としては、とはいえ学校の校内研修そのものをどう変えていくといいのかということ、研修センターに関わっている人たちが学ぶ機会が重要なのではないかと思います。教師教育という視点でどういう研修をしていったらいいのか、校内研修をどうデザインし

ていったらいいのか、あるいは職員室というものをどう組織開発していくことを伴走していくのか、そういう継続的な学習が支援センターの中で行われていることを期待しています。

それはそのセンターに関わった人はもちろんですが、そのセンターに関心のある人たちがそこで共に学べるようになるので、そこに知が貯まっていくのではないかと。最後に書いてありますが、そこに実践のコミュニティの創出が行われて、どんどん学校の伴走支援、あるいは研修のつくり方、組織開発の知見がセンターに貯まっていく。そして、そこに様々な関心ある人たちが集まってくるようなセンターになることを期待しています。極端に言えば、民間の様々な研修に高額なお金を払っていかなくても、ここに行けばいろいろな人とつながって学べるようになっていくようなセンターになっていくといいなと考えています。

今、風越学園でもラーニングセンターという組織内組織をつくって様々な研修の支援などを行っています。例えば、今、松本市と連携をしているので、パイオニア校のコーディネーターの方々と研修づくりのミーティングをして、松本市の合同研修会の形をぐっと変えてみるチャレンジをしてみたり、あるいは、浅間中学校の研究主任の方々が風越の研修の様子を見て、そこで学んだことを自分たちの学校の教室でどう生かすか、現場に戻って研修で試してみる。そこに支援で入って一緒に考える。

私たちは一私学であり馬力もないのでこの程度しかできませんが、支援センターがこのようなことを様々な形で様々な場所で様々な方々がやれるようになっていくと、新しい当たり前にチャレンジしたい学校がエンパワーされるようになっていくのではないかと考えています。

#### ○荒井座長

ありがとうございました。

授業改善から学校改革、あるいは組織開発へという捉えの転換が重要になると思っています。

では、竹内委員をお願いします。

#### ○竹内委員

ありがとうございます。よろしくお願いします。

まず、先ほど知事のお話を聞いていて、本質的なことをしっかり押さえられていると思いました。私も同じようなことを思っていて、言葉は少し語弊がありますが、まず公立学校の機能として、今までの蓄積が逆に肥大してきていることが背景にあるのではないかなと思います。だから今の業務量ややり方を基本として時間、人、お金が足りないという議論をしている限りは、たぶん解決はしないだろうと、私はずっと現場に近いところで感じています。

ですので、知事もおっしゃったとおり、本来学校でやるべきこと、学校でなければできないこと、その機能や役割をしっかりと精査して、集中したり、絞り込んだり、いい意味でのスリム化が必要で、逆に言うと、これまでやってきたことで、地域でもできることはもう手放す勇気を持つとか、そういうことも大事だなと思います。

何で私がそういう事を考えるようになったかという、今、山ノ内町は小学校3校の統合の議論が佳境に入っていて、やはり山ノ内町という小さな町全体を子どもにとっての学びのフィールドにしたいというところから、まず地域コミュニティを学びのフィールドにしようと、コミュニティスクールをしっかりと考える上では、その核となる学校と、それを支える地域の役割を見直して、もっと地域全体で子どもの育ちや学びを支えることを大事にしたいと思っています。

知事もおっしゃったとおり何でもかんでも学校にお任せすれば大丈夫という時代ではもちろんないですし、学校の先生方も責任感はずごく強いので、言われるとやってしまうということがあると思います。海外の学校に行っているのも思うのは、学校の先生方は基本的に残業していません。子どもたちが帰れば先生も帰る。でも別に学力が低いわけでもないし、子どもの満足度が低いわけでもない。

制度全体の違いはあるかもしれませんが、やはり学校の機能をしっかりと絞り込んで、集中して本来の機能の質を上げていくということ、県もそうですが、各市町村、学校、それぞれで本気になって、まずそういう議論をするということが、円卓会議で今日もいろいろと指摘されたことの一つの重要な背景にあるのではないかと思います。

それと、先ほど知事がおっしゃった子どもの意見をしっかりと反映するというのは、これはもう言うまでもなく、去年4月から始まっているこども基本法の第11条にも、子どもや保護者や教育・学びの当事者の意見をしっかりと施策に反映しなければいけないと法律で規定されているにもかかわらず、教育委員会ははじめ教育関係者は、こども基本法は私たちとは関係ないと受け止めている向きがあるのではないかと思います。

本当に子どもの意見をしっかりと取り入れるということ、学校もそうですし、地域、家庭、我々行政も、大前提として押さえるということも大事だなと思います。

あと1つだけ、具体的な予算も絡むところの提案をさせていただきたいんですけども、先ほど武田教育長から御説明がありました「TOCO-TON（トコトン）」と絡む話であり、また、岩瀬委員もおっしゃっていただいた学校改革支援センターの先の話になるかと思いますが、県と市町村の意識の共有や、様々な連携をしっかりと密にするためには、そのハブとなる人材が必要だと思っています。

今、町村には指導主事がないんですね。山ノ内町のように町費で、校長をされた先生に指導主事をお願いしているところもあるんですけども、県からその指導主事を、ぜひ町村にも派遣していただきたいと思っています。

これは県と市町村との連携のハブとか、コーディネートという意味合いもありますけれども、地域における広域連携という点でも、県から指導主事派遣されてくれば、より加速するのではないかと思います。

手法としては自治法派遣というやり方もありますが、各市町村が経費を負担する必要があり、県の先生の給与を町や村が負担をして指導主事に来ていただくということは、現実的には相当厳しい状況にあります。

先ほど岩瀬委員もおっしゃっていたように、学校改革支援センターができるのは非常に心強く、いろいろアドバイスもいただきたいと思ったり、できればこの「TOCO-TON（トコトン）」にも山ノ内町としてぜひ手を挙げさせていただきたいと思うんですけども、

そういうアドバイスだけではなく、やはり日常的に一緒に現場に入っただいて、仕事をしていただける指導主事の先生をぜひ市町村にも、わがままを言いますと、県の予算で派遣をしていただきたいと、あえてここで要望させていただきたいと思います。

いろいろなモデル事業をやっていただくととてもあり難いんですけども、やはりモデル事業というと数も限られてる中で、横展開をしていくということの難しさがどうしてもついて回ると思います。ですので、町村、長野県は特に村は35もあって日本一ですし、町村でも58と非常に多い。そういうところにしっかり周知徹底するという意味では、直接的に人を配置し、できればそれをコーディネーターとしての指導主事という立場の方に、町村に入っただくということが、結果としては非常に効果があるのではないかと考えるところですので、無理を承知での御提案をさせていただきたいと思います。

○荒井座長

ありがとうございました。最後のご発言の趣旨は、指導主事ではなく、市町村レベルの教育政策形成の役割を担っていただくポジションという理解でよろしいですか。

○竹内委員

そうです。指導主事というどうしても学校へのいろいろな指導ということですけども、例えば山ノ内町の教育施策全般のアドバイスを日常的に一緒につくっていただける、常勤でそういう方がいるといいなと思います。例えば具体的にコミュニティスクールをこれからしっかり推進したいときに、学校統合については、人を配置していただけるという仕組みはあるんですけども、やはり持続的な山ノ内町の特徴、特色ある魅力ある教育というものをしっかり定着させるために、県と町村との橋渡しもしていただきながら、さらに、北信地域全体の横の連携もお互いのハブとなっただけのような意味合いも含めて、北信教育事務所の先生が定期的に来ていただくんですけども、例えばその先生を、常勤として山ノ内町に派遣していただけるとか、具体的にはそんなイメージです。

○荒井座長

ありがとうございました。  
では草本委員、いかがでしょうか。

○草本委員

ありがとうございます。よろしくお願いたします。

まず、こちらの円卓会議は、知事、教育長、そして荒井座長をはじめとする委員の皆さんの熱量がすごいなと毎回思います。こういう会議から本当に何か変革が起こるといのは、正直そんなにたくさん見たことがないんですけども、きっと起こるんだろうなという期待を持って毎回参加させていただいて、本当にありがとうございます。

幾つかありまして、この「TOCO-TON（トコトン）」は名前もかわいいし、何かゆるキャラができそうな勢いでとても素敵だなと思います。残念ながらうちの学校は入らないと思いますが、公立の学校で手を挙げてほしいということです。

ここでちょっと気になるのが、岩瀬先生のところとか私どもの学校ですと、私立なので、

先生方は本人がいたくて私たちもいてほしいと思えば同じ人がいてくれるという良さはあるかと思えます。この「TOCO-TON（トコトン）」の記述を読んだときに、もうぱっと、白馬の中で何人かの校長先生の顔が浮かんで、きっと手を挙げてくださるんじゃないかなと思う方がいたんですけれども、公立の学校の場合は何年かのサイクルで先生方が替わられてしまうということで、あの先生はたしかもう3年目だとか、もしかしてもうすぐいなくなっちゃうかもと思うと、誰かが手を挙げて熱い思いで始めたけれども、その次に必ずしもそれを引き継げる人が来るのかどうかみたいなことは、実装されたときにどう運営されるのかという意味で少し不安に思いました。

例えば手を挙げて、校長先生がメインになられると思うんですけれども、希望すれば、何年のスパンでこのプロジェクトをやりたいからこれぐらい長くいさせてほしいみたいな要望を県に出せるとか、そういう仕組みがあるほうが、もしかしたら実効性はあるのかもしれないなと感じました。

あと、公立の学校の先生方はすごく熱心なんですけれども、それをやることによって、例えば今までどおりのやり方でもまあまあ教育がうまくいっていた場合に、あえて新しいことをやってもものすごくこけてしまったとか、保護者の方たちからたくさんの難しいクレームをいただいてしまったとか、そういう可能性ももちろんあると思うんです。

そういうことが想定され得るときに、それを超えてでもやろうと思うような気持ちを公立の学校の先生たちが持てるのか。一定のインセンティブがあるなど、仕組みの部分で考えたほうがいいことなのかもしれないなと思えます。

御本人のやる気と熱量だけでお願いするのももちろんあるかもしれないんですけれども、長い目で見てそれで続くかなというのが心配かなと感じました。

知事がおっしゃった子どもが主体だというのは本当にそうだと思います。本来はこういう会議にも、例えば最後の30分だけ生徒が出てくるとか、意見を表明してみるとか、そういうことがあってもいいのかなと思ったりします。

この前、中信教育事務所の方が、うちの学校に人権教育について研修で来てくださって、うちの生徒も交えていろいろお話をさせていただきました。そのときの話で、国連の子ども権利条約の第12条に、「自己の意見を形成する能力のある児童がその児童に影響を及ぼすすべての事項について自由に自己の意見を表明する権利を確保する」という権利があり、そういう権利を確保されるべきであって、続いて「この場合において、児童の意見は、その児童の年齢及び成熟度に従って相応に考慮されるものとする」となっていて、子どもが何かやりたいと言ったときに、「じゃあ、やっていいよ」と必ず言うというわけではないんですけれども、少なくとも子どもたちが自分の環境とか、置かれた状況に対して意見を述べたりできる権利があるというのを国連で定めていて、日本も批准しています。

それはすごく大事だけれども、たぶん日本の生徒児童でその権利を認識している人はあまりいない。なぜなら、それを実行する機会があまりないからと感じていて、そういう意味でもこういう会議に何らかの形で当事者である子どもたちが意見を言う機会があっても、もしかしたらいいのかもしれないなど、特に知事のお話を聞いていて思いました。

あと、すごく期待をして見ておりますのが、研究協議会のあり方を検討されているというところで、例えば私どもも、白馬南小学校の今年の校長先生が「うちの学校の先生を研修に送りたいんだけども行ってもいいか」と言ってくださって、うちがどういうふう

プロジェクト型学習をやっているか、タウンホールで子どもたちがどうやって意思決定しているかなどを見ていただく機会を設けることができました。ハイテックハイの先生をお呼びしてプロジェクト型学習の研修をやっていたり、うちの校長もソーシャル・エモーション・ラーニングの本を書いている、全米で講演するような人なので、そういう人の話を聞いてもらいたいなどか思ったりするんですけども、こういう面白いことをやっているのでもぜひと言って、こちらから手を挙げるのが非常にやりにくいというか、興味を持ってもらえるようなものなのかも分からないしみたいなものもあって、例えばこの研究協議会とかに、こういうのがうちの学校でできるんですけどもいかがでしょうかみたいな、それで先生方がその中から自分の興味がある研修を選んで出ただけのような仕組みがあれば、もしかしたら、長野県内は本当に面白いことをやっていたらっしゃる方がたくさんいらっしゃるの、本当の意味で先生方が興味を持って、自分の時間を使って研修しに行きたいと思えるものを見つけられることもあるのではないかと思います。

あと、今回のアンケートの結果はすごく面白いなと思っていて、基本的に皆さん仕事への満足感が高いけれども、給与その他の待遇に対して満足していない方が多いと。たぶん世界中の学校の先生たちも割とそうなのかなと思います。もちろん海外ですごく給与の高い先生方もいますが、それでもたぶん皆さん人間の常でそういうふうに感じてしまうのかなと思うんですけども、海外の学校の先生たちが給与が低いけれどもやりがいもあるしいんじゃないかなと思える理由の一つが、先ほど竹内委員もおっしゃっていたように、勤務時間が日本みたいに真っ暗になるまで残業しないと、インターナショナルスクール等にいたっては夏休みが2か月半ありまして、うちの学校の先生の場合は7週間ぐらい完全に休みです。学校にもう来ない。子どもがいないから来てもしようがないみたいになっていまして、長期休みが本当の先生たちの休みにもなっているというのがすごく違うところかなと思っています。

長野県からここを変えますといっても、難しいかもしれませんし、給与がものすごく高いわけではないかもしれないけれども、自分で自由にできる時間もあるし、子どもと関わってやりがいもあるし、教員という仕事を選んで幸せに働く先生方が、少なくともうちの学校とか海外の学校には多いのかなという気がしてまして、その辺の休みの長さなどが工夫できるものなのかどうか分からないんですけども、もしかしたらそういうところで少し先生方がゆっくり休んで充電して、またやる気を持って帰っていらっしゃるということにもつながり得るのかなと思います。

軒並み海外は本当に夏休みとかがたっぷり休まれるのに、何で日本の先生は本当にこんなに休まれないのかなというのは昔からすごく不思議に思っていたので、背景もあまり理解できていなくて恐縮ですけども、挙げてみました。

今回、既にこの段階で実践的にどうやっていくかみたいな話になっていることにすごく期待を持っていて、うちの学校は歴史も全然ないですし、すごく小さいところですが、実験校としていろいろ新しい取組をしているというところが強みだと思っているので、そういう研究協議会等でもし何かお役に立てることがあったらうれしいなと思っております。

#### ○荒井座長

ありがとうございました。共通するのは、教師に限らず教育関係者の学びのあり方をど

う構想するかという観点かと思えます。現状でも、例えば、他県と比較した場合、公立学校に所属している学校教師と学校事務職員が共に学ぶ場も体系的に整えられていると言いはない状況があります。また今、御提案いただいたように公立学校と私立学校が共に学ぶ、フリースクール関係者と学校関係者が共に学ぶ、こうした機会を意識的に設けていくことが重要です。昨年度から、公立学校関係者とフリースクール関係者で学び合う場が設定されつつあるということも聞いておりますけれども、こうした取り組みを学びの文化、風土にしていく必要があります。

では、大久保委員、お願いします。

#### ○大久保委員

具体的な取組についてはほぼしっかり出されていると思えますので、私のほうは、先ほど出ました「TOCO-TON（トコトン）」の関係で、実際にどういった取組が実践できるかということで、私どもは本当に大きな期待を持っているところであります。

それについて、今まで我々も何かをしたい、改革したいけれどもどうしたらいいかというのなかなか難しいところだったんですけども、具体的にこういったものが出てくるということで、その重点取組項目、これは各地域でいろいろな思いがあると思えますので、そういったものをしっかりと実践をしていきたいと思えます。私ども大いに期待したいと思えますので、よろしくお願ひしたいと思えます。

#### ○荒井座長

ありがとうございます。既に、「TOCO-TON（トコトン）」に対して多数問合わせがあるという話ですので、どのような提案が出てくるかすごく楽しみにしています。

では、大日方委員、お願いします。

#### ○大日方委員

お願いいたします。教職員のアンケート調査にありましたように、学校現場の先生方の自己肯定感というか、自尊感情がやはり低いなというところが私も気になります。知事も「諦めムードを感じる」というような言葉で語っていただきましたが、やはりそのところを何とか施策を含めて県民全体でカバーしていく必要があるのかなと思えます。

学校現場の先生方は様々な課題へ対処しなければいけない状況の中で、自信とか誇りとか、そういうものがだいぶ薄らいできてしまっているということをおもいます。そういうことを考えたときに、この円卓会議のこれまでの議論のシンボリックな事業として「TOCO-TON（トコトン）」とか、あるいは学校改革支援センターとか、こういうものを出していくということは大事なメッセージにつながっていくことだと思えます。一方で、それとは別に、学校現場で本当に日々子どもと向き合っている先生方が、教師としての使命感に燃えてやりたいことをやれるようにするためには、やはり本業に関係しないようなものを大いに削ぎ落としてあげる必要があるんだろうなと思えます。それは、県なり、市町村なり、あるいはPTAなりに取り組んでほしい大事な役割ではないかなと思えます。

シンボリックな事業とは別に、一人一人の先生方に教師としての自信や誇りを持ってもらえるような支援も大事に考えていただければと思っております。

○荒井座長

ありがとうございました。働き方改革の議論で言われる、「贅肉」と「筋肉」ですよね。

「贅肉」の部分を削ぎ落とす、精選していく観点は重要ですが、精選の方法として学校が独りよがりにならない形で地域や保護者の方と対話をしながらやっていくことが重要です。また働き方改革の取り組みが、学校改革、授業改善にもつながっていくことは全国の取組でも実証されつつあるかと思います。

では、三輪委員お願いします。

○三輪委員

お願いいたします。「TOCO-TON（トコトン）」の関係、私たちも非常に期待をしているところであります。先ほどお話が出ましたように、現場の声としてはいろいろな支援センターをつくれるわけですが、たまに来てアドバイスをいただくだけでは、年1回の教育課程研究協議会となんら変わらないと。やはり改革をするときには、動き出すその最初のところのギアチェンジをするときのヒューマンパワーといいますか、「これでいくぞ」というエネルギーを一緒に出してくれる生え抜きの先生方の力がやはり必要で、伴走の仕方、その動き出すところをぜひ重点的に、1校に1回くらいという訪問ではなく、そのところを厚く、ぜひ一緒につくっていただきたい。指導主事が本気で伴走したらこれだけ学校は変わるんだぞというところを、一緒に見せていただきたいというのが現場の声です。ぜひそのような形で伴走していただくことを願っています。

それから当たり前となる学び方の一番最初が、小学校1年生の学習にあるということも小学校現場では感じています。何かを変えていくときに一番教職員が苦しいところは保護者からの問い合わせです。幼保小の連携の中で保育園の遊びの工夫については、近隣の保育園に出向いて1日過ごし学んできて、活動の中で取り入れられるんですけども、子どもたちが思考力を深めていくときの言語の獲得や、数字の概念の獲得の部分について、低学年の学びをいかに一斉指導から外して、子どものそれぞれに合った形をつくっていくかということは、昭和の時代から行ってきた日本の教育を変えていく本当に基となるところです。しかし、それを途中から急に変えるということは、1年生からの教育を見てきた保護者にとっても大きな不安になると思います。

ですので、変えていくスタートは、やはり幼保小の小学1、2年生の学習指導要領の部分はどう捉えて現場で実現するかということにあらうかなと思います。ぜひその改革に全県挙げて1歩、日本中のモデルになるような提案ができないかなということを考えているところです。

○荒井座長

ありがとうございました。

では、竹内委員お願いします。

○竹内委員

三輪委員の最初の発言の中で、1日の時間を短くしたというお話がありました。先ほど

草本委員から出た白馬南の校長先生の取組、白馬南の校長先生は私も大変お世話になった先生なんですけれども、手挙げ方式のモデル事業もそれはそれであり難しいんですけれども、既にやはり校長先生の裁量の中でいろいろな新しい取組がチャレンジがされている。

この具体的な方策の②の、教員が学校でチャレンジしたいことを支えるということにつながるんですけれども、既にそうやって、結構本質的な新しい取組をされている学校を、やはりもっともっと可視化するというのを、ぜひ何か県の教育委員会、例えば何かしらの形で評価したり、それを全県にインフォメーションしていただいたり、もっと言うとなんかインセンティブを出していただいたりとか、既にやっているところを可視化して、それを校長先生同士で共有しながら横展開をしていくということも同時にやっていただけると、より何か面白い広がりになるかなと、今お話聞きながら思いました。

○荒井座長

ありがとうございました。では最後に教育長、知事から一言ずつ、よろしく願いいたします。

○武田教育長

どうもありがとうございました。「TOCO-TON（トコトン）」の話で、先ほど草本さんがおっしゃられたことが実は非常に重要なことで、この「TOCO-TON（トコトン）」の実践校と人事をどう絡めていくかという問題です。

今まで、どちらかというとも県教委でパイロット校をつくったり何らかのモデル校をつくったときに、その人事についてあまり深くやってこなかったところがあります。それは、県教育委員会の人事と事業の部署が違うからです。

ですから、県教委自体が縦割りからもう少し連携を取っていくということが一つ重要だと思っていますけれども、ただ、私自身が「TOCO-TON（トコトン）」をやっている中で県教委自体の組織的な縦割り体質というのを打破していかなければいけないんだけど、そんなにすぐにはうまくいかないというのがあります。

最近強く感じていることは、「TOCO-TON（トコトン）」にしても、学校改革支援センターにしても、いろいろなことを新しく挑戦していくときに、その抵抗勢力は意外と身近にあるということを実感していて、そこをどう崩していくのかというところがありますけれども、幸いにも知事が味方になってくれるとおっしゃっているので、力強くやっていけるかなと思います。

もう一つは、信州教育の今までやってきたことの中にヒントがあるんじゃないかと校長会から出ていますけれども、どういう意味でその校長先生が言ったか分かりませんが、信州教育は何か誤解されているところがあって、信州教育は何かというと、失敗と挫折の積み重ねなんです。信州の教師たちがいろいろ挑戦して失敗をし、それで何かうまくいわずに挫折をし批判され、その積み重ねが信州教育で、いつしかその信州教育というのが伝統みたいになってしまっていて、挑戦することや挫折することではなくて守ることになってしまったのが今のありようだと思っています。さっきもありましたけれども、失敗や挫折を恐れずやるのが変えていくことだと思いますので、また皆さん方にいろいろ叱咤激励をいただきながらやっていきたいと思っています。またよろしく願いいたします。

○荒井座長

ありがとうございました。  
知事、いかがでしょうか。

○阿部知事

私は武田教育長と一緒に改革をしていかなければいけないということで、武田さんのことは私は大変信頼していますので、教育現場のこともよく分かる武田さんと変えていきたいと思います。今、失敗の話がありましたけれども、いろいろなチャレンジをしていこうというときに、失敗しても許されるような寛容な社会をつくっていかないといけないんだろうなと思います。私はずっと、この学校教育というのは自治が大事だと思っています。学校の先生が主体的に考え行動できる、あるいは各学校を取り巻く保護者であったり地域の皆さんが学校のあり方を主体的に考えて行動できる。そうしたことが何よりも重要だと思っています。

今の教育は、それとはかなり真逆の形になっていて、さっきのアンケートにも非常によく表れているんじゃないかなと思っています。他律的に何かこれをやりなさい、例えばどこかの学校で何か問題があると、全県的だったり全国的にこれをやれと指示が来たりとか、これだとやはり学校の先生方のモチベーションも上がりませんし、幾ら時間があっても足りなくなるんだろうなと思います。

そういう意味では、私としては学校がやるべきこと、先生方がやるべきことをぜひ学校現場の皆さんと一緒にしっかり見直していきたいと思っていますし、そのことも踏まえながら、処遇の改善であったり、教員配置の充実だったり、こうしたことにも取り組まなければいけないと、取り組んでいきたいと思っています。

加えて、いろいろな外部環境をどう整えるか、保護者の皆さんの過大な要求をどう抑えるかとか、あるいは県は主体的に変えてみますけれども、様々な機関や国から学校に対してどんどん来る要請などをどうやって防波堤になるかとか、そうした学校現場の自治とか自由を念頭に置きながら、そうしたものを守っていくことにも政治家としては取り組んでいきたいなと思います。

そういう意味で、やはり学校、先生方、あるいは学校のステークホルダーの皆さんが主体的に行動していただくことを強く期待していますので、そうした考え方や思いをまず多くの人たちと共有していきたいと思っています。

今までだと信州学び円卓会議で何かを決めてやるんでしょうとか、知事とか教育長が何かこれやれって言うんでしょうという発想にたぶんなってしまうと思うんです。実際に各団体と話していても、何となく何すればいいんですかという意見もあって、何をすればいいかは私が考えるんじゃなくて学校の皆さんが考えるんですよというのが本来のあり方だと思います。そういうところも含めて、多くの皆さんの考え方やもの見方も変えながら、長野県から学びの「新しい当たり前」を一緒につくっていきたくと思いますので、荒井座長をはじめこのメンバーの皆さんにも、引き続き一緒になって取り組んでいただければありがたいと思います。よろしくお願いたします。

○荒井座長

ありがとうございました。

では、ここで毎度おなじみの時間になりますけれども、グラフィックレコーディングということで、田上さん、よろしくお願いいたします。

○田上氏

それでは2分間ほどで今日の2時間の会を振り返ればと思います。よろしくお願いいたします。

2024年10月16日、第5回信州学び円卓会議です。

最初に、地域版の報告から始まっていきました。その後、教員向けのアンケート、やはり仕事は満足している、だけれどいろいろな余白が少ないというところで、やりたいことをやれる時間をつくりたいということが、アンケートからすごく見えてきたところかなと思います。

そのほかにも、教育関係団体との意見交換会の中からは、「新しい当たり前」とは何か、そのイメージがつきづらいという話もありました。けれども教育条件の整備だったり、関係者の連携、当事者の声に耳を傾ける、そういったところから、今後の話としては連携・協働、そしてその取組の発信というキーワードが見えてきました。

その上で今後の進め方について、これまでの議論を積み重ねてきたところから実行のフェーズに移るといって、今日は本当に転換期の会議だったと思います。

その中で、武田教育長から示された「TOCO-TON（トコトン）」だったり、阿部知事からのみんなが同じ方向を見て全員が主体的に進んでいくというところが、今日示されたかと思えます。

その中で、ただ全員が当事者というところと、どうやって進めていくのか、そのところで皆さんから意見がたくさん出てきました。子どもこそが作り手というところだったり、先生方が進んでいくためのエンパワーだったり、「自治」というところをキーワードに、今日の議論は進んでいったかと思えます。

ただ、その中でやはり役割を見直して、先生たちがちゃんと休めて生き生きと働ける、自尊感情、自信も持てる、そんなことをやるために進んでいく。そのために、ギアチェンジのときのパワーが必要とのことで、今はたぶんチェンジの転換期かと思えます。そのときのパワーを、いろいろな人たちが連携をしながら、信州教育、失敗と挫折から生まれた信州教育をこの信州学び円卓会議でも実現していく、そんな今日の会議だったかと思えます。ありがとうございました。

○荒井座長

ありがとうございました。改めまして、昨年の9月から1年間かけて様々な主体と様々な議論をしてきましたけれども、大変お世話になりました。今後はこの「新しい当たり前」を「共に創る」点に焦点を当てて、当事者である子どもを中心に据えながら、皆さんでさらに理解を深め実行に移していける努力を実現していくことを願っております。引き続き御協力のほどよろしくお願いいたします。

では、事務局のほうにお戻ししたいと思います。今日もお世話になりました。ありがと

うございました。

#### 4 連絡事項

○樋口振興幹

最後に事務局から連絡事項でございます。本日御説明させていただきました教員向けアンケートの集計結果などの資料につきましては、本会議の終了後、間もなく県ホームページに資料として掲載いたしますので、御承知おきいただければと思います。掲載ページにつきましては、10月9日付けで発信しております信州学び円卓会議のプレスリリースに記載のURLから御確認いただきたいと思います。連絡事項は以上となります。

#### 5 閉会

○樋口振興幹

それでは、以上をもちまして本日の会議を終了いたします。皆様、ありがとうございました。お疲れさまでございました。

（了）